

映画「39 (サンキュー) 窃盗団」は発達障害とダウン症の兄弟が、心神喪失者の行為は罰しないと定めた刑法三九条が自分たちを守ってくれると信じて、空き巣を繰り返す社会派コメディ。数多くのドキュメンタリー作品を手掛けてきた押田興将監督が、ダウン症の実弟の押田清剛と、もう一人の弟の押田大を主演に据えて自主製作した。(井上喜博)

映画「39窃盗団」

押田監督が映画の構想を抱いたのは約十五年前。「八人きょうだい」の長男の僕にとって、下から二番目の清剛は、他の弟妹より歩き始めたり、しゃべり始めるのが少し遅いだけの当たり前の存在だった。それが他人にとっては当たり前でないことが分かり、この感覚の違いを解消しなければ、映画監督として前に進めないと思った。そもそも映画の道を選んだのも、弟がきっかけだったという。「高校を中退してブラブラしていた時、両親の代理で障害者の進路に関する講演会に出席したんです。そこで講師の人に、進路を決めるのは本人であって家族ではない、と一喝された。清剛がテレビでドラゴンボールを見てコーラを

ふてぶてしく生きる姿見て

ダウン症の実弟を主演に 押田興将監督

飲むのが好きなら、それが人生の夢でも構わないと言われ、衝撃を受けた」

それまで夢に挑戦して破れることを必要以上に恐れていたという押田監督は、駄目元で映画監督を将来の目標に掲げ、日本映画学校に入学。故今村昌平監督に師事し、「カンゾー先生」「セブテンバー11」の助監督を務めた。社会的に重いテーマをユーモアを交えてシニカルに描く今村監督の「重

「心神喪失者の行為は罰せず」

刑法39条 盾に泥棒…笑い交え



「シビアな現実をユーモアを通して描きたかった」と話す押田興将監督

喜劇」の作風は、今回の作品にも受け継がれている。

映画の中でヒロシ(大)は振り込め詐欺のリーダーにだまされて刑務所行きとなり、キヨタカ(清剛)は近所に住む女性に福祉施設入りを勧められ、電車の中で女子高生にキモイとばかにされる。それでも、ふてぶてしく生きる二人の姿は、誰もが生きづらい現代社会にあって「強さ」を感じさせる。「笑って見終わった後に、この映画は何だったんだろうと考えるもらえれば、監督としてうれいですね」

出演はほかに山田キヌヲ、斎藤歩、品川徹ら。

※新宿K's cinemaほかで17日公開。



映画「39窃盗団」の一場面。左から押田大、押田清剛、山田キヌヲ